

地域ねぶたの活用と地域活性化

～青森市の地域ねぶたの存続と市外地域への活用～

青森公立大学 経営経済学部
地域みらい学科 教授 佐々木てる

はじめに

本報告書は 2023 年度「地域ねぶたの活用と地域活性化」事業の成果報告書である。この事業は、新型コロナ・ウィルス感染症の影響を受けた、青森市内の地域ねぶたの存続について、および「地域ねぶたのコンテンツ化」の市外の利用可能性についての明らかにするために行われた。

本研究の背景として、新型コロナ・ウィルス感染症の影響によって、コロナ前には 70 か所以上行われていた地域ねぶたの運行が、令和 4 年は約半数となっていた。令和 5 年は 42 の地域でねぶたが行われたが、今後継続が困難な地域があることもわかっている。そのため地域ねぶたの存続に関して、その課題を明らかにする必要がある。また同時に青森市以外でも地域ねぶたをパッケージ化すること（＝「地域ねぶたのコンテンツ化」）によって、市外地域の活性化につながっている事例がある。つまり地域ねぶたとは、地域の活性化に一定の効果を持つこと可能性がある。

こうした研究背景のもと、本事業では令和 5 年に運行を行った地域ねぶたの団体への調査票調査、および青森市外の「地域ねぶたのコンテンツ化」の実態調査を行った。まずは、質問票調査の結果報告を行う。

1 地域ねぶた存続に関する質問票調査

1.1 調査概要

地域ねぶたに関する質問票調査は 2023 年 12 月 6 日～12 月 26 日にかけて、郵送にて行われた。調査票は、青森観光コンベンション協会の協力をあおぎ、2023 年度に地域ねぶたを出陣させた 42 か所のうち、送付可能な 38 か所に送付した。また、別途地域ねぶたを出陣させた団体からも協力受けた。その結果、26 団体から回答をもらうことができた（回収率、約 66%）。質問内容に関しては、紙幅の都合もあり別途報告書を参照してほしい。ここでは本事業に直接的にかかわる項目に関して、報告を行うこととする。なお有効回答数は（n=）としてあらわしている。

1.2 2024 年度の開催について

まずこれまでの地域ねぶたの開催に関して、もっとも回数が多い地域で 52 回であった。なお 50 回以上が 2 か所、40 回以上が 2 か所、30 回以上が 3 か所、20 回以上が 4 か所、10 回以上が 3 か所であった（無回答 3）。平均は約 20 回であり、この行事が長く地域に根づいていることがわかる。なお最も古い地域では 1951 年から開始している。

2024年の開催について、開催予定は23か所、未定が2か所、開催しないが1か所であった。特に開催しないと決めている地域は、1979年から42回開催している地域であり、老舗の地域ねぶたがまた一つ消えようとしていることが明らかになった。

1.3 費用について

費用について聞いたところ、平均で約45万3千円であった(n=26)。最大値は130万円であった。内訳をみると、やはり制作費が最も高く、費用の約32%を占めていた。そのほか飲食代、子供へのお菓子代、と続いている。逆言えば、ねぶた制作をせずに、前年度使用したものを使用することになれば、その分経費は浮く計算になる。制作費がかかっていない団体は5か所あった。今後、地域間の連携を強め、ねぶた本体のシェアに取り組む事で、経費削減につながるかもしれない。

運行資金に関しては、協賛金が約27%を占めている。そのほか、町会費(16.6%)、寄付金(17.6%)である。聞き取り調査を行った際に、地域に商業施設や病院などの施設がある箇所は、協賛金が集まりやすいとの話があった。地域ねぶたの継続はこうした地域の特徴にも左右されるといえるだろう。

1.4 参加人数について

地域ねぶたの参加人数については、1日平均134人程度であった(n=26)。そのうち地域外の人約19%(n=21)であった地域ねぶたのおおよその規模が明らかになったといえる。最も多い場所では約390人、200人以上の場所は5か所あった。

参加者の構成の平均(n=25)をみると、統制が15人、囃子方が25人、曳手が13人、跳人が90人、それ以外の警備などが4人であった。地域ねぶたに参加した経験上いえば、それ以外に一緒に歩く観客、沿道の観客がいる。地域ねぶたが多くの人に関わりをもって成立していることがわかる。なお、参加者のおおよその世代の平均であるが、小学生以下が58人、中高生が14人、大人が62人であった。また大人のうち、約32%が高齢者(65歳以上)という結果であった

コロナ前と比べての人数に関しては増えたが3か所、同じくらいが10か所、減ったが12か所であった(n=25)。全体的には減ったか、同じくらいという結果であった。新型コロナウイルスは地域ねぶたの参加者の減少に大きな影響を与えていることが示された。

1.5 地域ねぶたの課題について

地域ねぶたを運行するにあたり、課題となっているのはやはり、「運営者の育成」であった。26地域中19地域(約76%)が課題とした。そのほか、「子供の数」(52%)、「囃子方不足」(48%)、「資金調達」(44%)、「曳手不足」(40%)と続いている。調査結果から今後の運営側の人出に不安を感じていることが明確になった。逆に跳人不足(8%)、観客数(12%)は課題として指摘する地域は少なく、地域ねぶたのニーズはあると考えられる。そのほか、ねぶたの制作場所や保管場所が課題と指摘した地域もあった。

1.6 地域ねぶた存続の意義

地域ねぶた存続の意義については、圧倒

的に「子どものため」が多く、26 地域中 21 地域 (84%) が回答した。また特徴的だったのは、「地域のつながり」(60%) や「地域のにぎわい」(64%) を指摘する地域が多かったところである。すなわち本研究の仮説通り、**地域のねぶた存続が地域活性化につながる****と考えている地域が多い**という証明になったといえる。なお半数ではあるが伝統文化継承のためと回答した地域もあった。なお伝統文化継承と答えた地域の平均回数は 27 回であり、やはり長期にわたって継続している地域はその傾向がつかいと推測できる。

1.7 ねぶた本体について

ねぶたの制作に関して質問したところ、次年度も継続して同じものを使用する地域が全体の約 44% であった。それ以外に多かったのは、「自分達で制作する」(28%)、「プロに依頼する」(24%) であった。また将来的には、「作れる人に依頼する」(40%) が、「自分達で制作する」(32%) を上回った。同時に「借りてくる」は、次年度は 8%、将来は 16% となっている。このことから、**将来的には自分たちの地域だけで、ねぶた本体の制作を進めることが困難だと考えている傾向が読み取れる。**

なおその他の回答欄にあったが、地域によってはねぶた師に指導してもらい、子供たちが制作する取り組みがある。こうした工夫は多くの地域住民と作り上げる地域ねぶたとして、特筆できるだろう。

1.8 自由回答欄より

そのほか自由回答欄にあったコメントを少し紹介しておく。まず書かれた回答をみると、次世代の育成に関する切実な想いが

つづられているのが目立つ。「課題は、人材育成です。次に引き継ぐ人たをいかに育てていくかが大きな課題です」・「人口減少、少子高齢化などの影響で、今後の運営や、人員不足も考えていかなければならない。(中略) 先々のことも考えて育成をしていかなければならないが、その手段が自力では難しい」・「運営責任を持てる団体は高齢化し、子ども育成会のメンバーですら、60 代、70 代がほとんどです」。**全体として多いのは上記のように少子高齢化により次世代の育成の困難さであった。**それ以外でも「資金調達」「制作者」の問題が指摘されていた。

1.9 質問票調査のまとめ

上記のような調査結果から、次のような提案を行い、まとめとしたい。

①調査結果から、「継続はしたいが高齢化が進み継続が困難になりつつある」という傾向が読み取れた。そのため運行に関する人材を他から補填する必要がでてくるだろう。青森ねぶた祭では、それぞれの団体に囃子方が存在する。地域ねぶた運行に関して、ボランティアなどの募集を組織的に行う必要がある。すなわち、市やコンベンション協会、ねぶた祭の囃子委員会、運行団体などとの連携である。

②次に、ねぶた制作にかかる、費用と人材の問題が指摘された。これを解決するには、今後「ねぶたシェア」が重要だと思われる。すなわち、現在運行されている地域ねぶたを他の地域でも運行することである。ただし、そのためには地域ねぶたの連携、開催日程の調整などが必要になるだろう。次の段階としてそうした地域ねぶたの連携が必要になってくるとと思われる。

2 他地域のねぶた活用について

本研究調査の目的として、地域ねぶたが地元地域だけでなく、市外の地域に様々な形態で活用されていることを明らかにすることがあった。そのため本事業では北海道岩見沢の地域ねぶたとの交流、観光という面での星野リゾートの取り組み、また東通から地域ねぶたの可能性についての調査をおこなったので、報告しておく。

2.1 地域ねぶたの実践例

地域ねぶたの実践例として、北海道岩見沢市のねぶたがある。この地域ねぶたは青森出身の北海道教育大学岩見沢校の学生が発起人となって開始したものである。当初は展示だけであったが、コロナ禍を乗り越え、ここ3年ほど大きなイベントとなっている。イベント運営、ねぶた制作、囃子も学生が中心になって行っており、多くの協賛金をあつめている。その中心はやはり地域ねぶたの利用である。街中を小さいながらもねぶたが運行され、囃子、跳人が登場することで多くの住民が盛り上がっている。こういった街で、大学生が中心になって地域ねぶた行うことで非常に活気がもたらされているという点で特筆に値する。



(写真：岩見沢ねぶたに登場したねぶた)

2.2 そのほかの地域ねぶたの活用・可能性

東通でも若い人たちが中心になって、地域祭を通じた活性化の試みがなされている。2023年には「東通村住民参加型イベント実行委員会」が中心になって、花火や音楽フェスを行っている。担当者などの話では、運行する機会がうまくできれば、ねぶたを活用したいとの話が出ていた。課題となっているのは「ねぶた本体をどう調達するか」「ねぶたの保管場所は」といったことである。地域ねぶたのコンテンツ化が進めばこういった地域にもさらに活用が広がるであろう。

地域ねぶたのコンテンツ化を観光産業に利用した取り組みとして、「星野リゾート青森屋」が指摘できる。敷地内にある干支ねぶた、館内の施設にある七福神のねぶた、ねぶたに特化した客室「ねぶたの間」、温泉に浮かぶねぶたなど、ホテル自体が「ねぶたに特化した」ものとなっている。担当の方によると、「青森の祭りに少しでも興味を持ってもらい、実際の祭りに参加してほしい」という想いがある。特にイベントにおいて囃子、跳人、ねぶたの3つがそろい、コンパクトにパッケージ化されているのは、「地域ねぶたのコンテンツ化」の参考なるだろう。

まとめ

本事業では地域ねぶたの必要性和将来にむけた可能性をテーマに調査を行ってきた。どの行事にも共通して言えることであるが、少子高齢化を背景に後継者育成が課題となっている。しかしながら、それを逆手にとって、コンパクトで特徴をもったコンテンツとして作り直すことで、地域の活性化の起爆剤することは可能だといえるだろう。